

平安時代仮名文学作品にみえる漢語動詞の一考察

浅野敏彦

一

筆者は、「平安時代の漢語語彙について」(同志社国文学 13号)に於いて、源氏物語と大鏡とに共通してみえる漢語を、日常生活の会話や読み書きの中で男女に限らず使われる漢語であると考え、それらを『分類語彙表』(国立国語研究所編)の分類に依って、体・用・相の三類に分類し、若干の考察を行なった。その中の用の類に分類した漢語は、 \wedge 装束く・愛敬づく・御覧す・具す \vee などのいわゆる漢語動詞であった。しかし、ここでは、語構成要素である漢語を考察の対象としており、漢語動詞という文法的範疇でくくりながら、文法的な考察は行なわなかった。

本稿は、活用という動詞の持つ文法的性格の一つに考察の中心を置いて、平安時代の仮名文学作品にみえる、漢語動詞——漢語を語構成要素に持つ動詞を考えてみようとするものである。

平安時代仮名文学作品にみえる漢語動詞の一考察

資料には、竹取物語・伊勢物語・源氏物語・大鏡・枕草子・土佐日記・蜻蛉日記・紫式部日記・更級日記の平安時代仮名文学作品を用いた^①。次に、漢語動詞として抽出した語の範囲について述べることにする。漢語動詞といっても、漢語がそのまま日本語の動詞として用いられることは、 \wedge 東京へ出張 \vee のような用法以外にはないのであるから、正確には、前述したように、「漢語を語構成要素に持つ動詞」と言うべきであろうが、便宜的に漢語動詞と略称することにする。そして、漢語動詞は、語構成の面から、

イ 漢語十す(奏す・対面す)

ロ 漢語十接尾辞(気色ばむ)

ハ 漢語の語尾を活用させたもの(装束く)

の三類に大別できるようである。漢語動詞とは、この \wedge 奏す・対面す・気色ばむ・装束く \vee のような語をいうのである。ところで、漢語動詞は、他の和語動詞と複合したり(御覧じ置く・引き具す)、

接頭辞を伴ったり(うち誦す)するのであるが、本稿では、これらの語は対象としていない。ただ、△引き具す▽などのように、漢語動詞が複合動詞の後項にきている語は、漢語動詞に助詞や助動詞が下接することになり、△具す▽などと同様に扱うことにした。△うち誦す▽についても右と同じことがいえるので、△誦す▽と同様に扱うことにした。しかし、△御覧じ置く▽などのように、漢語が複合動詞の前項にきている語は、△御覧す▽などと同様に扱うことはせず、用例として抽出していない。これは、助詞、助動詞が直接漢語動詞に下接しないという理由からである。

以上述べた基準に従って、資料とした九作品から漢語動詞を抽出し、次に述べる、本稿でいう活用形によって分類したのが資料1である。

二

本稿でいう活用形は、従来、学校文法などで用いている未然形・連用形という六つの活用形とは異なっている。本稿では、漢語動詞に下接する助詞、助動詞を含む文節を対象として活用形を考えた。その結果、従来の活用形との違いは次のようになる。

- 一、常に助詞、助動詞を伴う未然形は本稿では考えない。
- 二、従来の連用形は、中止法としての用法を持つものには中止形に、

副詞法としての用法を持つものは連用形に、というように二つに分けた。

三、終止形は、その中を叙述法、推量法、命令法の三つの法に分け、従来の命令形は命令法の中に入れた。^②

四、連体形は、ぞ・なむ・や・か等の結びで従来の連体形となっているものは、本稿でいう終止形とし、体言を修飾しているものを連体形とした。

五、已然形は、△こそ▽の結びとなっているものは、本稿でいう終止形とし、接続助詞△ば▽を下接するものを条件形とした。

六、本稿でいう条件形の中には、従来の未然形に△は▽のついたもの、終止形に△とも▽のついたものなども入る。

なお、具体例を次に示すことにする。

〔連体形〕

- ① かの君の御事ども猶、絶えぬさまにきこしめし、気色御覧ずる折もあれど、(源氏物語 I—395—⑩^④)
- ② たゞ、かく御前にさぶらひ、御覧せらるゝ事の、変り侍りなむことを、口惜しく思ひ給へ。(源氏 I—125—⑦)

〔連用形〕

- ③ 上臈中臈の程ぞ、余り引き入れざうずめきてのみ侍るめる。

(紫式部日記)

④ かつは、おほし消ちてよかし。「御らむぜすもや」とて、これにも」と、聞え給へり。(源氏 I—343—⑩)

〔中止形〕

⑤ 御覽ぜさせて、「たゞ、塵ばかり、この花びらに」と聞ゆるを、わが御心にも、物、いと、あはれに思し知らるゝ程にて、

(源氏 I—285—⑫)

⑥ 「怪し」と、御覽じて、「今は、の給へかし、誰かぞ」と、

の給へば、(源氏 V—206—⑨)

〔条件形〕

⑦ 御返り御覽すれば、「いと、かしこきは、おきどころも侍らず。(略)「などやうに、乱りがはしきを、」心をさめざりける程」と、御覽しゆるすべし。(源氏 I—40—⑬)

⑧ 御覽ぜさせねど、さきさきも、かやうなる、御心しらひは、

常の事にて、目馴れたれば、(源氏 V—83—⑩)

⑨ いそぎまゐらせて御覽するに、珍らかなる児の御かたちなり。

(源氏 I—28—⑧)

〔終止形〕

① 叙述法

⑩ 世にしろす、敏うかしこくおはすれば、あまりに恐ろしきまで御覽す。(源氏 I—43—⑤)

㊦ 推量法

⑪ 背きぬる世の、去りがたきやうに、自らひそみ御覽ぜられ給ふ。(源氏 I—126—④)

⑫ すこし涼しき水の流れも、御覽ぜさせんと切に、きこえ給へば、(源氏 I—188—⑥)

⑬ いかにか御覽じけむ。(源氏 I—272—⑮)

㊧ 命令法

⑭ 折よくて、御らんぜさせ給へ」などあり。(源氏 I—394—⑫)

⑮ かゝる人、御覽ぜよ。(源氏 V—263—④)

さて、資料1に於いて、終助詞下接例とした29例は、終止形413例中の7.0%にあたるという意味であつて、29例は413例の中に含まれている。たとえば、△さばかりのことになりて逗留せさせ給はんやは▽(大鏡)の例では、△逗留せさせ給はんやは▽は終止形の中の推量法の中に入つていて、終助詞を下接するものとして、再び数えあげられているのである。

資料2は、推量法にどのような助動詞が用いられているかについてまとめたものである。先に、終止形の推量法の例として示した⑫の例では△む▽を、⑬の例では△けむ▽を推量法とするために用いているということになる。なお、△む▽や△べし▽には、婉曲や可

資料1

	連体形	連用形	中止形	条件形	終 止 形				計 (のべ 語数)	ことなり 語数
					叙述法	推量法	命令法	終助詞 下接		
実数	369	6	507	212	285	84	44	29	1507	166
					413			(7.0%)		
%	24.5	0.4	33.6	14.1	27.4					

(注) 百分率は<各活用形の数値÷のべ語数(1507)×100>である

資料2

	めり	らむ	らし	べし	まじ	む	まし	じ	けむ	計
実数	6	9	0	9	2	47	3	3	5	84
%	7.1	10.7	0	10.7	2.4	56.0	3.6	3.6	5.9	100

資料3

	ば や	て しか	にし しか	な む	も が	な (禁止)	そ	か (疑問)	か は	や	や は	ぞ	か (詠嘆)	か な	な (詠嘆)	か し	は	計
実数	4	0	1	0	0	1	1	4	0	2	1	0	0	5	1	4	0	24
	14										10							
%	58.3%										41.7%						100	

(注) をや1 もや1 ものを1 を3

能という意味などもあるが、本稿では、終止する用法に用いられているものに限ってみているので、婉曲や可能などの意味は表われてこないであろうので、推量の中には入っていない。ただ、意志は、推量と同じとして考えたことになる。

資料3は、下接している終助詞の種類についてまとめたものである。△をや・もや・ものを・を△も終助詞に準じて考えたが、これらは欄外に注として示しておいた。なお、これらの例6例を加えると、終助詞下接例は、24プラス6の計30になり、資料1の29よりも1多くなるが、これは、△ふかき心の程をも、御覽せられにしがな△(源氏)の例が、△にしか△と△な(詠嘆)△の両方に入っていることによる。

三

以上の三つの資料からは次のようなことが言えるようである。以下、各資料の項目順に述べる。

ア 連用形が最も少なく、次いで条件形が少ない。

イ 中止形が最も多くなっている。

ウ 終止形の中では、叙述法が七割を占めていて、他の二

法より圧倒的に多い。

エ 推量の助動詞では、△む△が六割近くを占めていて、

他の助動詞と大きな差がある。

オ 推量の助動詞の \wedge らし \vee は例がない。

カ 終助詞では、 \wedge ぞ \vee より左の、塚原鉄雄氏のいわれる \wedge 論理的判断を表現する構文機能をもつもの \vee と、 \wedge ぞ \vee より右の \wedge 感性的な印象情念を表現する構文機能をもつもの \vee との間の数の上での差異はない。

キ 資料1の \vee 語数¹⁵⁰⁷をことなり語数¹⁶⁶で除した漢語動詞一語の平均使用度数は、9.1である。

まず、ウについてであるが、叙述法が多くを占めることは、言語表現一般に言えることであり、漢語動詞に限ったことではないであろうと思われる。

オの \wedge らし \vee の例がないことについては、 \wedge らし \vee が和歌に多く用いられていることを示す調査結果^⑤もあり、漢語動詞に \wedge らし \vee が下接しないのも肯首できるところである。

\wedge む \vee が助動詞全体の六割近くを占めているというエについては、仮名文学作品に多く用いられる \wedge べし \vee との間に大きな差が生じるという結果を示している。これは、資料2は、終止形に用いられた例のみの数値であることよっている。終止形以外の例をも含むと \wedge む \vee 63例、 \wedge べし \vee 49例で、各々全体の41.7%、32.5%ということであり、 \wedge む \vee と \wedge べし \vee との間に多く差が生じるというものではない。

平安時代仮名文学作品にみえる漢語動詞の一考察

い。しかし、今述べたことは、いいかえれば、 \wedge べし \vee は全体49例の中の二割にも満たない9例のみしか終止形には用いられていないということになり、七割以上が終止形に用いられている \wedge む \vee と好対照を示している。

カの終助詞の下接について述べた点に関しては、源氏物語の、動詞を含む文節に下接している終助詞の例と比較してみると、^⑦源氏物語における動詞全体の場合も、やはり、 \wedge 論理的判断を表現する構文機能をもつもの \vee と \wedge 感性的な印象情念を表現する構文機能を持つもの \vee との間に数の上での差異はない。それ故、カの条項は、漢語動詞に特有なことというわけではない。しかし、用いられる個々の終助詞の使用率については、漢語動詞と源氏物語の動詞との間に差はみられる。

次に、キで述べた平均使用度数についてであるが、今、『古典対照語い表』の統計表を用いて、今回資料としたものと同じ九作品にみえる漢語全体の平均使用度数を算出すると4.2となる。^⑧これと、漢語動詞の平均使用度数を比べると、名詞など代言のままで用いられる漢語よりも、はるかに多く、人々によって用いられていたことが推測できる。ちなみに、和語の平均使用度数は10.7である。^⑨

最後に、本稿での考察の中心となる活用形の出現度に関するア、イの二条項について述べることにする。これまでの動詞の語彙論的

研究に於いても、各活用形の出現する割合について明らかにしたものは二、三ある。これらの研究と異なり、本稿では、先述したように漢語動詞を含む文節を対象として活用形を考えているので、これから先学の研究を直接比較対照資料とすることはできない。

本稿での活用形について、いま一度述べておく。たとえば、①△花咲く▽、②△花咲きけり▽、③△花咲かず▽に於いて、従来の考え方では、①は終止形、②は連用形、③は未然形となるのであるが、本稿では、咲く・咲きけり・咲かずを対象にするので、いずれも文の言い終りに用いられている終止形であり、叙述法であるということになる。つまり、本稿の終止形は文末文節に用いられたものということでもある。条件形としたのは、条件法に用いられているもの、連体形としたのは、連体法に用いられているものである。それ故、従来の考え方では、いずれも未然形とされる△花咲かば行かむ▽、△花咲かざる木なり▽の場合なども、△咲かば▽で条件形、△咲かざる▽で連体形と考えることになる。なお、連用形については、第二節の二項で述べたとおりである。

さて、アの連用形が最も少ないことについてであるが、動詞は、形容詞とは違って連用修飾語にはならないということであり、本稿のように、文節を対象としないで、動詞のみを考えれば、たとえば、川端善明氏の指摘されるような例を除いて、この活用形は零となる

はずのものである。本稿に於いても、△べし▽・△ず▽の連用形（従来の）が下接したものとや、副助詞・係助詞の下接したものが、この活用形に相当することになるが、資料1に示したとおり、ごく少ないものであった。故に、この連用形が少ないことは、動詞一般に通じることであって、ひとり漢語動詞のみの現象というのではない。

連用形に次いで少ない条件形は、ヨーロッパの言語でいう仮定法 (subjunctive mood) とも一部重なる活用形であって、本稿でいう終止形とともにムード (mood)^① に関係する活用形であるが、この条件形が活用形全体の14.1%¹ということは、次に述べる中止形との比較に於いて興味ある事実を示していると思われる。

中止形は、本稿でいう終止形や条件形とは異なり、ムードには関係しないし、また、テンスにも関係しない活用形である。△き・けり▽という過去の助動詞は、中止形となる形（従来の連用形）を欠いているし、推量の助動詞も、△べし・めり・まじ▽以外は、中止形となる形を欠いているのである。

このように、漢語動詞は、ムードやテンスに関係しない中止形に用いられている例が多く、条件形のように、ムードやテンスに関係する活用形に用いられる例が少ないという好対照を見せているのである。

次に、連体形は、助動詞の△む▽が、連体形に用いられた場合、意志よりも推量の意味が多くなり、その推量の意味も希薄になって、婉曲の意味で用いられることを考えると、連体形もまた、中止形と同様、ムードに関係することの少ない活用形といえるかと思われる。そして、この活用形の出現する数が、中止形に次いで多いのである。いま、ごくわずかしかな出現しない連用形を除いて、四つの活用形をムードと関係することの濃いものから順に並べると△終止形・条件形・連体形・中止形▽という順序になる。そして、ムードに関係しない、あるいは関係することの少ない中止形と連体形に用いられる例が⁵¹58.1%で、六割近くを占めることになる。

以上、本節で述べてきたことをまとめると、資料1・2・3からうかがえることとして列挙したアキは、次の三つに要約できる。

- 1 漢語動詞は、ムードに関係しない活用形に多く用いられる傾向にある。
- 2 漢語動詞に下接している終助詞の種類は和語の場合に比べて少ない。
- 3 漢語動詞の平均使用度数は、漢語全体の二倍以上であり、和語の平均使用度数とほぼ同じである。

四

平安時代仮名文学作品にみえる漢語動詞の一考察

前節において、漢語動詞全体を通してうかがえるいくつかの点について考察を加えたのであるが、次に示す資料4からは、漢語動詞としてひとつくりにした166語の中の各々の語が、いくつかの層に分かれるのではないかということが予測しうる。すなわち、資料4下欄の△御覧す▽の数値は、漢語動詞全体の数値(上欄)と大きく異なっているのである。そこで、本節では、漢語動詞をいくつかの層に分けてみようと思う。その層に分ける指標に、

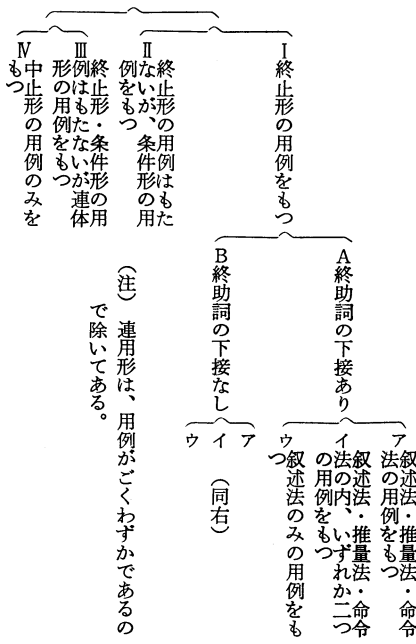
資料4

	連体形	連用形	中止形	条件形	終 止 形			計	
					叙述法	推量法	命令法		終助詞下接
実数	369	6	507	212	285	84	44	29	1507
					413			(7.0%)	
%	24.5	0.4	33.6	14.1	27.4				100
実数	68	1	52	41	58	37	19	9	276
					114			(7.9%)	
%	24.6	0.4	18.8	14.9	41.3				100

(注) 上欄は漢語動詞全体の数値で、資料1の数値と同じである。下欄は、△御覧す▽のみの数値である。

どの活用形が出現するか、あるいはしないのかということを用いようと思うのである。具体的には、資料5に示したような分類基準を用いた。この資料5によって分類、整理したのが資料6(31頁)である。資料6は、語構成による分類も併用している。なお、資料6は、本稿で資料とした語彙の一覧表でもある。

資料5



資料6の各記号は、資料5の各記号と対応する。また、語の左肩に○を付けてある語(屈す・用意す等)は、命令法を持つ語であることを表わしている。語の後の○でかこんだ数字は、その語がいくつの作品にみえるかということを示している。たとえば、△念す▽

であれば、七作品に共通して用いられていることを表わしている。なお、Ⅳの中止形の用例のみをもつ△減す・経営す・翡翠だつ等▽が、他の活用形の用例を持たないとは断言できはしないのであるが、平安時代の仮名文学作品の主要なものには全て資料としており、また、漢語動詞そのものが、仮名文学作品に用いられることが少ないであろうことを考えれば、資料を広げたとところで、そう大きく傾向が変わるということはないであろうと思われる。

次に、資料6を各項に属する語の数で表わすと資料7のようになる。資料7からは、次のようなことがうかがえる。

資料7

活用形	語構成	るもの			合計	える語 一作品にのみみ		
		サ変動詞	動詞	接辞・語尾の活用による 一字漢語サ変動詞		実数	%	
								一字漢語サ変動詞
Ⅰ	A	ア	3	2	0	5	3	23.1
		イ	4	1	1	6		
		ウ	0	2	0	2		
	B	ア	2	1	0	3	40	59.7
		イ	4	10	1	15		
		ウ	16	30	3	49		
Ⅱ		5	7	4	16	11	68.8	
Ⅲ		8	13	14	35	27	77.1	
Ⅳ		7	18	10	35	34	97.1	
合計		49	84	33	166	115	69.3	

語構成		+ 変 動		詞 の も の		接辞・語尾の活用によるもの		
活用形		1字漢語十字		*2字漢語十字		*2字以上も含む		
A	ア	°念じ⑦ °奏す⑧ °啓す④		°対面す⑧ °御覧す⑦		な	し	
	イ	請す⑦ 調す⑥ °屈す④ 臆す④		逗留す①		気色いばむ④		
	ウ	な	し	臆動す① 変化す①		な	し	
	エ	°制す⑤ °信す①		°案内す⑤		な	し	
I	イ	具す⑦ 参す① 害す① 傾す①		°用意す④ 参座す① °消息す①	供養す④ 精進す④ °加持す③ 下向す①	修法す③ 詐誇す①	装束く⑥	
	イ	具す⑦ 参す① 害す① 傾す①		°案内す⑤		な	し	
	イ	拜す⑤ 因す⑥ 興す④ 怨す③ 感す③ 孝す② 動す② 請す② 謙す① 賞す① 愛す① 称す① 熟す① 懲す① 望す① 要す①		修理す④ 聴聞す③ 往生す① 庚申す① 撰故す① 卑下す① 正三位す①	装束す④ 懸想す③ 行幸す② 懐妊す① 見証す① 施入す① 内外す① 八講す①	懈怠す③ 加増す② 出家す① 護身す① 誕生す① 唱歌す① 入滅す①	憂敬づく④ 上手めく② 上衆めく①	
	ウ							
II		辞す③ 案す① 報す① 論す① 掠す①		化粧す⑤ 入内す①	夾算す① 葦殿上す②	儉約す①	大纏す① 節分す①	騒動く② 気色だつ② 法服だつ① 修行者めく①
		封す② 相す① 弄す② 治す① 期す① 類す① 質す① 死す①		追従す② 影向す① 入道す①	念誦す② 受領す① 墮落す①	念仏す② 見物す① 遊戯す①	行事す① 大纏す① 廻心す① 修行す①	労たがるだつ② 懸想だつ② 廊めく② 修行者だつ① 上臈だつ① 家司だつ① 屏風だつ① 生親族だつ① 中将だつ① 隨身だつ① 調度めく① 才がる① 消息がる① 懸想ぶ①
III								
IV		減す 染す 準す 宿す 妊す 帯す 授す 以上①		経営す③ 荒涼す① 運参す① 夜行す①	興言す① 結縁す① 讒言す① 放言す①	処分す① 進退す① 作文す① 現形す① 乱声す①	碧翠だつ① 法氣づく① 化めく① 艶だつ① 王家づく① 随身めく① 氣色づく① 氣色づく① 試染めく① 懸想ばむ① 以上①	

ア 漢語動詞166語の中の²42.2%にあたる70語が、ムードと関係することがなかったり、稀薄であったりする中止形と連体形しか持っていない。

イ 一作品にしか見えない語が、活用形各々の中で占める割合は、表の下へ行くほど増加する傾向がある。

ウ 漢語サ変動詞と、接辞を付けたり、語尾を活用させたりすることによって漢語動詞となっている語との間に差がある。

ウについて少し補足すると、終止形の用例を持つ語が、漢語サ変動詞では、一字漢語、二字漢語ともに、50%以上であるのに対して、接辞を付けたり、語尾の活用による語は、15.2%であるということである。このことは、接辞を付けたり、語尾を活用させて漢語動詞となっている語は、ムードに関係することが少ないということである。

さて、アは、前節のまとめの1と同じことを別の角度から見たこととなる。それ故、本節で考察しようとする層という問題については、イとウとが関連するわけである。これを要約すれば、△単数文献にみえる語や、接辞を付けたり、語尾を活用させて漢語動詞になっている語は、ムードに関係することが少ない▽ということになる。このことは逆に、△複数文献にみえる語や、漢語サ変動詞は、ムードに関係することが多い▽ということでもある。もっとも、このこ

資料 8

分類	活用形		連体形	連用形	中止形	条件形	終止形	計	共通作品数
	語								
I ・ A	ア	対面す	21	0	21	1	37	80	8
		念ず	12	0	25	20	29	86	7
		御覧ず	68	1	52	41	114	276	7
		奏す	27	0	10	22	37	96	6
		啓す	11	0	2	22	21	56	4
	イ	誦す	25	0	28	13	12	78	7
		調ず	6	0	13	1	3	23	5
		臆す	3	0	3	0	6	12	4
		屈す	11	0	6	4	8	29	4
		気色ばむ	17	0	31	7	7	62	4
ウ	逗留す	0	0	0	1	1	2	1	
	震動す	0	0	0	0	1	1	1	
	変化す	1	0	0	0	1	2	1	

とは、右に述べたような傾向がうかがえるということであり、例外もあるわけである。資料8として、資料6のⅠAに属する語についての活用形の出現数を示したが、△逗留す・震動す・変化す√は、単数文献にみえる語であるが、条件形や終止形に用いられている。接辞を付けることによって漢語動詞に用いられている△気色ばむ√は、条件形や終止形に用いられている。このような例外はあるが、△色気ばむ√では、終止形、条件形に用いられている例が各々11,3%ずつであるのに対して、中止形の例は50%であって、大勢は、右にまとめたところでよいと思われる。

資料8に示した漢語動詞は、使用度数も高く、資料とした九作品の半数以上の作品にみえる語も六語あり、平安時代にあつて、多くの人によつて使用され、理解されていた漢語動詞であると思われるが、そのような語は、また、ムードにも関係する終止形や条件形に用いられることが多い語でもあつたのである。このような漢語動詞の層を日本語の語彙の中に深く入りこんでいる漢語動詞と考えたいと思うのである。そして、逆に、資料6のⅣに位置する漢語動詞を十分日本語化していないものと考えるのである。

五

平安時代の仮名文学作品に用いられている漢語動詞は、漢字、漢

平安時代仮名文学作品にみえる漢語動詞の一考察

語を用いることをことさら避けようとした女性の手になる仮名文に用いられていることで、けつして珍奇な漢語ではなかったであろうと思われる。また、△す√と複合したり、接辞を付けたりにしているわけで、和語と漢語との融合した形になっていて、日本語化の一步進んだ漢語と考えられる。加えて、平均使用度数も和語と変わらない高さであつた。これらの点から、漢語動詞は、当時の識字層の人々にとって、十分理解もされ、使用もされた漢語動詞であつたと考えられる。

しかし、その一方で、動詞の持つ大きな文法的性格であるムードに関係することのない語が四割あり、全用例の出現度からみても、ムードとは関係のない、あるいは、関係の薄い中止形や連体形に六割近く用いられているのが漢語動詞であつた。動詞の主な文法的職能が述語になることであるという考えに立てば、漢語動詞は本体である絵画を飾る額縁に喩えることができるかと思うのである。

注① これらの作品を選んだのは、いずれも平安時代の代表的な作品であり、作者が男性、女性のいずれにも偏していないし、ジャンルも物語・随筆・日記とにわたつていて、文体的な偏りが無いということ、宮島達夫氏編『古典対照語い表』(笠間書院)が資料とされた作品と共通し、統計資料等を用いることができることによる。使用した索引は次のとおりである。なお、源氏物語は、本文は日本古典文学大系によつた。○竹取物語(山田忠雄「竹取物語総索引」武蔵野書院)○伊勢物語(大野晋他「伊勢物語総索引」明治書院)○源氏物語

